ISSN 2185-341X

紀要

石器製作からみた矢柄研磨器という道具…… 重田　勉　（1）

近江湖西地域の土師器
－古墳時代中期から後期にかけて－…… 籠尾　拓幸（7）

滋賀県内出土の須恵器貯蔵器1
－古墳時代中期を中心に－…… 髙島　悠希（13）

志賀・中村狐塚古墳測量調査報告…… 辻川　哲朗・福井　知樹（24）

犬上川右岸における集落の変遷
－彦根市福満遺跡を中心として－…… 中川　治美（37）

高島郡出土の底部糸切り土師器に関する基礎的研究
－「皿化」についての一考察－…… 川嶋　泰輔（51）

中世観音正寺の中心伽藍について
－観音寺城と観音正寺その（4）－…… 伊庭　功　（61）

近江地域の近世銭貨…… 森田 真由香（70）

38

公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2025. 3

近江湖西地域の土師器

―古墳時代中期から後期にかけて―

籠尾拓幸

目次

１．はじめに
２．古墳時代中・後期の土師器に関する研究史
３．型式変遷の検討
４．近江古墳４様式の検討
５．おわりに

― 論 文 要 旨 ―

近江地域における古墳時代の土器編年は、植田文雄氏によって組まれている。当時は古墳時代中・後期の土師器が希薄であり、近江古墳様式を提唱し、古墳時代全体を通じた氏の編年は貴重な成果であった。

しかし、氏の論考が刊行されてから 30 年の月日が経つ。資料の増加が著しく、当該期の土師器研究も大きく進展したため、もう一度検討をおこなう必要がおおいにあると考えられる。

そのため、今回は現在の高島市域に相当する湖西地域に焦点をあてる。そのため、当該地域の資料を集成し、おおまかな変遷を述べる。検討対象は高杯、小型丸底土器、甕としたい。

検討の結果としては、供膳器が粗雑化し、煮炊き器は韓式系土器の影響を受け、新たな調理方法が出現する変遷がわかった。

また、今回の検討の結果から、近江古墳様式における２つの課題を指摘したい。

１つ目は、近江古墳４様式の時期区分である。この時期は布留２式から４式までが一括されている。しかし、今回の検討にあたり、布留３式と４式の区分ができたため、近江古墳４様式は、見直しが必要であると考えられる。

２つ目は、高杯の形式分類についてである。古墳時代中期に該当する高杯の一つに口縁端部が外反し、杯底部と立ち上がりとの接点が段をなす A ４類がある。しかし、定義にそぐわない資料を提示している。この２つの課題はこれからの土師器研究において再検討をおこなう必要があろう。

今回は検討対象が高杯、小型丸底土器、甕にとどまり、古墳時代後期の変遷を追えなかった。また周辺地域との比較を考察することができなかった。これらの点を次回以降の課題としたい。

――――　**キーワード**

近江古墳様式　古墳時代中期　古墳時代後期　湖西地域　土師器

１．はじめに

近江地域における古墳時代の土師器について詳細に述べられている論考としては、植田文雄氏による『古墳時代土器論』（植田 1994）や『前方後方墳出現社会の研究』（植田 2007）を挙げることができる。古墳時代中・後期の土器研究が須恵器中心であった当時において、土師器をとりあげた論考は僅少であり、地域全体を通じて土師器の様相をピックアップした氏の研究は大変重要なものであった。

ただし、植田氏の論考が刊行されてから 30 年の月日が経ち、資料は著しく増加している。また、畿内地域で当該期の土師器研究が活発となり、研究は大きく進展している。そのため、近江の土師器ももう一度検討をおこなう必要があると考えられる。

そこで本稿は、おおむね現在の高島市域に相当する湖西地域に焦点をあて古墳時代中期の土師器様相を概観したい。

２．古墳時代中・後期の土師器に関する研究史

（１）畿内エリアの研究

かつての土器研究　古墳時代の土師器研究は、古墳時代前期の土師器の研究に重点が置かれていた。寺沢薫氏の編年（寺沢 1986）や、米田敏幸氏（米田 1991）の編年、古式土師器の年代学（財団法人大阪府文化財センター編 2006）の刊行など、様々な研究がおこなわれている。

しかし、古墳時代中期からは、須恵器の研究に重点がおかれ、土師器の研究は遺跡単位のものにとどまるなど、低調な状態が続いた。

1990 年代後半になると、辻美紀氏が畿内地域の土師器編年（辻 1999）を提示したことを契機に、当該期における土師器の研究が本格的におこなわれるようになる。辻氏は、高杯を基軸に古墳時代中・後期の編年を提示した。この編年により、高杯は、口縁端部が外反する高杯から、口縁端部が直口する直口高杯、口縁部が内湾し、椀形を呈する椀形高杯に分かれ、古墳時代中期末から後期前半には高杯の資料そのものが減少するという変遷が明らかとなった。

その後、辻氏は、河内地域における土師器様相を検討した。ここで旧国単位で土師器様相を検討し、当該期の土師器の時期区分や、他地域との比較をおこなう必要があると述べた（辻 2006）。その後、畿内地域は大和（中野 2011）、畿内に境界を接す伊賀地域（中野 2023）まで検討されるようになった。

（２）近江地域における古墳時代の土師器研究

近江地域においては、植田文雄氏の『古墳時代土器論』がある（植田 1994）。近江古墳様相を提唱した植田氏のこの論考は、古墳時代全体を通した土師器編年が組まれていなかった当時において重要なものである。

しかし、氏の論考の刊行から既に 30 年あまりの年月が経ち、再検討をおこなう必要があろう。

（３）研究史上の課題

近江における古墳時代中・後期の土師器様相に関する研究の課題としては２点あると筆者は考える。

一つ目は近江古墳時代４様式の見直しである。植田氏の編年は、布留式における２式から４式が一つの時期としてまとめられている。そのため、この段階を詳細に分ける必要があろう。しかし湖西地域には布留２式に相当する資料が少ないため、本稿では布留３式と布留４式、いわゆる布留式新段階古相と新相の検討から、近江古墳様相の区分を試みたい。

二つ目は、高杯の型式分類である。古墳時代中期における高杯において近江古墳様相はＡ１、Ａ２、Ａ４型式が設定されている。その中のＡ４類は、口縁端部が外反し、杯底部と立ち上がりとの接点が段をなすものとして提示されている。しかし、口縁端部が外反せず、椀形を呈する形状も編年図に提示されている。このように定義が曖昧な点もある。

３．型式変遷の検討

（１）検討の方法

本稿では、湖西地域の遺跡から出土した高杯、小型丸底土器、甕を対象とする。そして、型式の変化が顕著にみられる高杯を基軸に、大まかにではあるが古墳時代中期の土師器変遷を検討したい（図１、図２）。

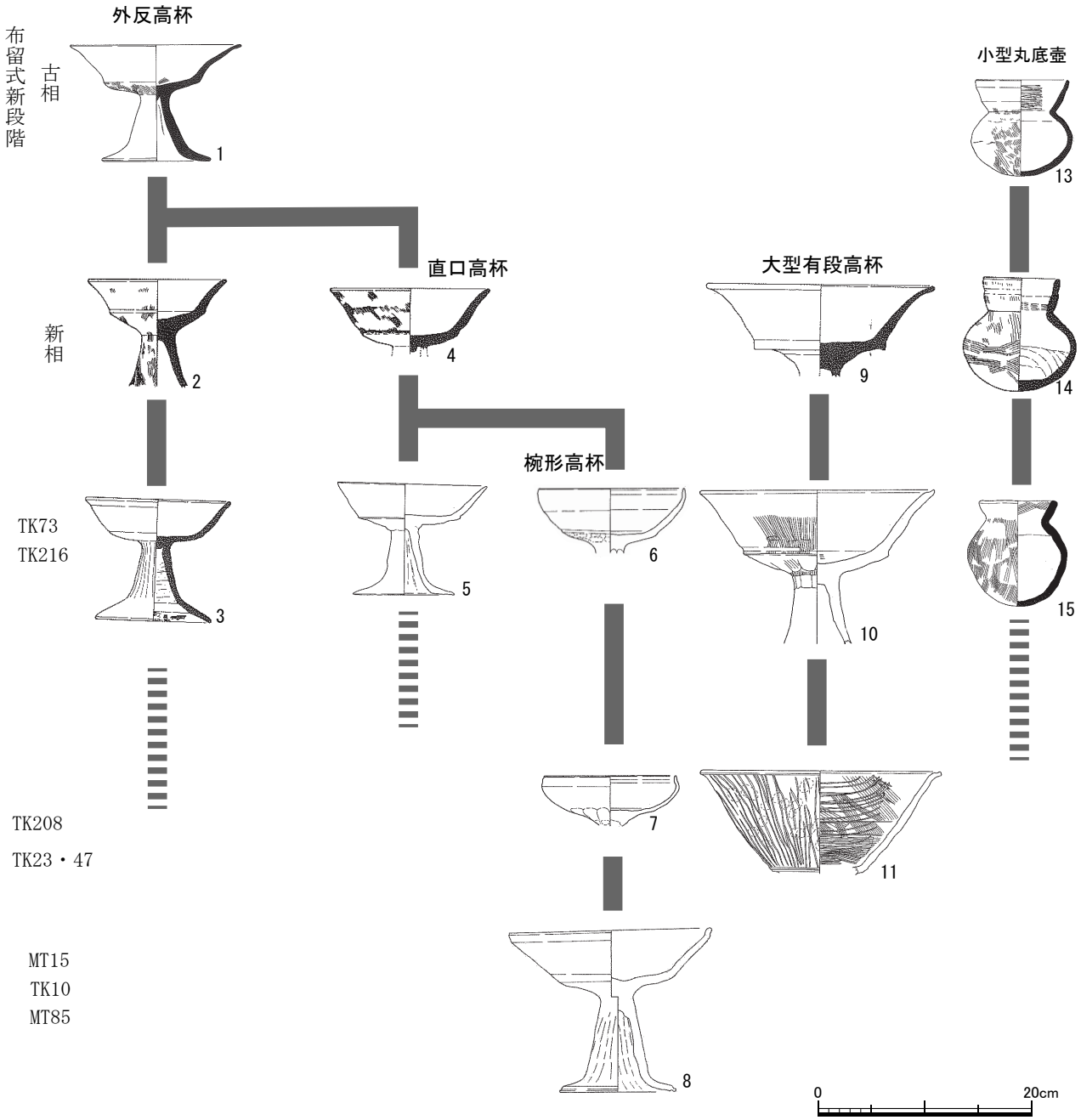
時期区分は寺沢薫氏（寺沢 1986）辻美紀氏の編年案（辻 1999）を踏襲する。形式分類においては辻美紀氏の論考を踏襲し、分類している。

（２）土師器変遷の検討

布留式新段階古相　近江古墳様式における４様式であり、布留３式に相当する時期である。当該期の資料として針江川北遺跡 SX ４土器群 A、吉武城遺跡 SD １上層を取り上げる。どちらの遺構も古い時期と考えられる資料があるが、小型丸底土器にミガキ、ハケ調整など、精製のものと粗雑なものが入り混じるため、この段階で設定する。

高杯は口径が 16cm ほどで、器高は 11cm ほどのものがある（図１－１）。調整としては、ハケ調整が主体であり、提示した資料は杯底部に施される。これは今までおこなわれてきたミガキ調整をおこなう資料が少なくなるため、粗雑化したものとしてとらえてもいいだろう。また、布留２式から３式にかけて法量が減少することから、湖西地域でもこの現象が起きたととらえ、この段階としたい。

甕は外面ハケ調整、内面はケズリ調整、口縁端部が肥厚するものである（図２－１）。布留式における典型的な調整をおこなうものが多い。



1：針江川北遺跡（II）SX4土器群A(滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会1994)

2.4.9.14：南市東遺跡SD602(安曇川町教育委員会1979)　3：南市東遺跡SB701(安曇川町教育委員会1979)

5.6.10：下五反田遺跡D調査区SH12

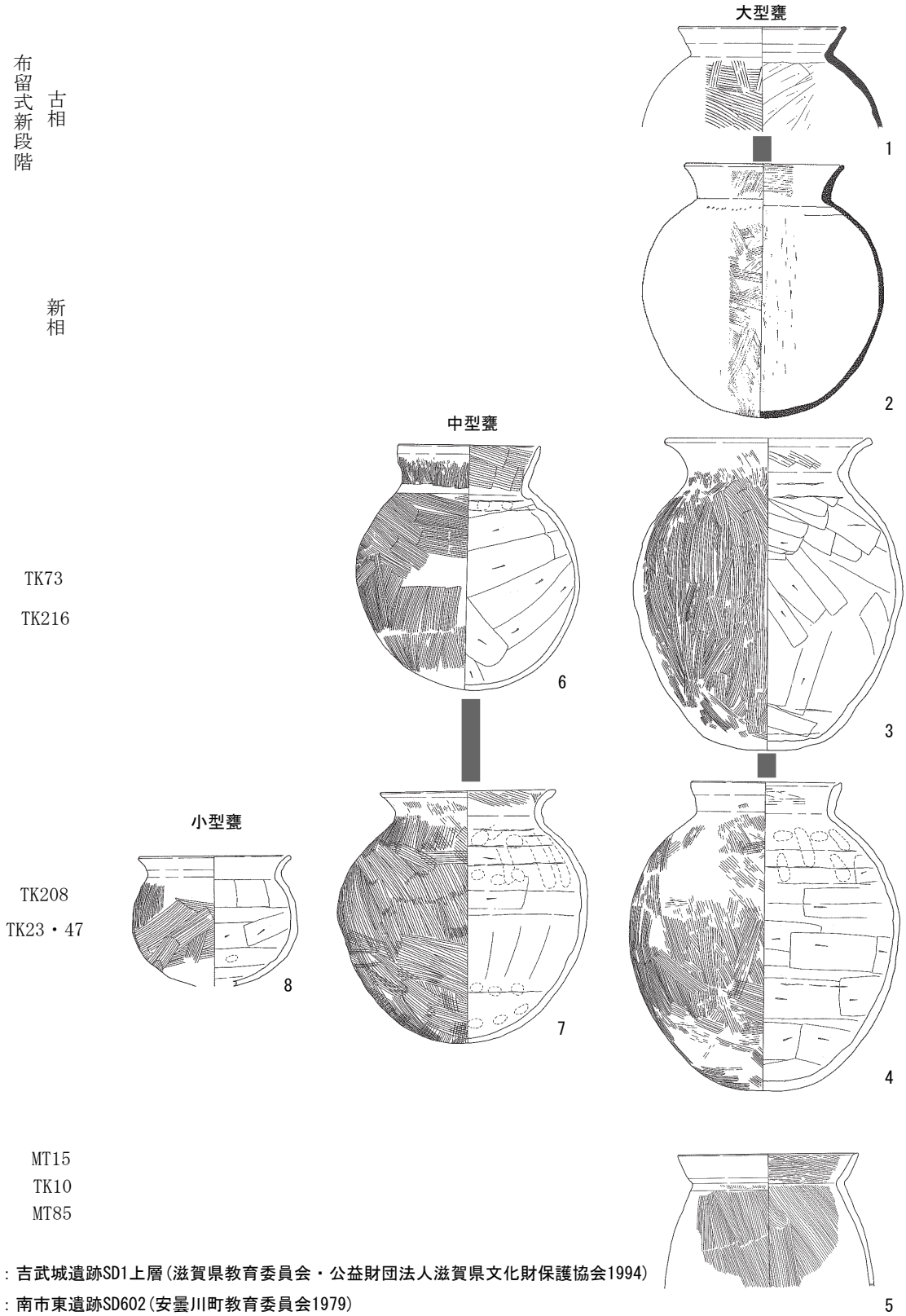
7：下五反田遺跡F調査区SH03(5.6.7.10すべて滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2004)

8：南畑古墳群（東地区）D調査区S17(高島市教育委員会2019)　11：下五反田遺跡F調査区SH05

12.13：吉武城遺跡SD1（上層）(滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(1994)

15：南市東遺跡SD1003(安曇川町教育委員会(1980))

図1　高杯・小型丸底土器の変遷(S=1/6)



1：吉武城遺跡SD1上層(滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会1994)

2：南市東遺跡SD602(安曇川町教育委員会1979)

3.6：下五反田遺跡D調査区SH12(滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2004)

4.7.8：下五反田遺跡F調査区SH03(滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2004)

5：上御殿遺跡15区S2(滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2019)

図２　甕の変遷(S=1/6)

このように今までおこなわれたミガキ調整が省略され、ハケ調整やケズリ調整で終わるものが多くなる段階といえる。精製器種も小型丸底土器以外のものは姿を消し、供膳器の様相が変化することも、この段階の特徴と言えよう。

布留式新段階新相　近江古墳４様式から５様式に相当する。この段階は、南市東遺跡 SD602 の資料を取り上げる。

この段階では、杯部を直口させる高杯（以下直口高杯）と大型有段高杯が出現する。外反高杯は、口径が 12.5cm 程度と縮小する。

小型丸底土器は口縁部の形状が多様化する。直線状にたちあがるもの、立ち上がりが短いもの、口縁端部が短く外反するものがある。

甕は口縁端部の肥厚がなく、外反するものが加わる。この段階は須恵器の生産が始まる段階であり、ここでとりあげた南市東遺跡 SD602 においても、取手付椀が確認されているため、布留式新段階新相の基準としてとりあげた。土師器甕においては布留式の規範が崩れるとされている時期である。湖西地域でも布留式の規範から逸脱する資料がしばしばみられるようになる。

TK73 ～ TK208 型式　近江古墳６様式から７様式に相当する時期である。南市東遺跡 SB701、SD1003、下五反田遺跡Ｄ地区 SH12 の資料を指標とする。

この段階では、TK73 ～ TK216 型式の須恵器が共伴する。高杯は椀形を呈するものが出現する時期でもあり、今回とりあげた各遺構においても椀形高杯が出土している（図１－６）。小型丸底土器はこの段階を最後に姿を消す（図１-15）。

甕は韓式系土器の影響を受け、体部が長胴化する。口縁端部も外反するものが多くなり、布留式甕は数を減らす（図２－３・６）。

変遷図には提示をしていないが、この段階で甑が出現する。調理方法の変化がおきたと考えられる。

この段階では供膳器、煮炊き器の様相が大きく変化したと考えられる。小型丸底土器の消滅、布留式甕の減少が特徴である。供膳器は、高杯がその役割を果たすようになった時期であろう。

TK208 ～ TK23・47 型式　近江古墳７様式から８様式に相当する。高杯の減少、サイズの変化が起きる時期として、この段階を設定する。

高杯においては、外反高杯、直口高杯がみられなくなる。椀形高杯と大型高杯は残存するが、椀形高杯は杯部高の縮小が起きる（図１－７）。大型高杯においては、口径の縮小がみられる（図１-11）。

煮炊き器においては、大きな変化はなく、大型の甕と中型の甕が多い（図２－４・７・８）。

MT15 ～ MT85 型式　ここで古墳時代後期初頭に少し触れておきたい。この段階は、畿内において、土師器供膳器のさらなる減少が起きる。相当する時期は近江古墳９様式から 11 様式と幅が大きい。

この段階は資料が少ない。高杯においては、畿内地域でも同様の現象が起きており、湖西地域も畿内の波にのまれたといえる。また、横穴式石室から出土する例がみられる。南畑古墳群東地区から出土したものは、口縁端部を内湾させるものである（図１－８）。

甕は資料が少ない。上御殿遺跡から出土したものを提示する（図２－５）。

４．近江古墳４様式の検討

以上、大まかではあるが、おおむね古墳時代中期から後期初頭に相当する時期の土師器変遷の検討をおこなった。

今回の検討で、近江の土師器編年において見直しをするべきである点をいくつが述べる。

一つ目は、時期区分の細分である。研究史で述べたように、近江古墳４様式は、布留２式から４式と広い時期を１つの様相として述べているが、高杯、小型丸底土器の変遷から、詳細に区分することが可能であると言えよう。

２つ目は、高杯の型式分類である。本稿では、高杯の形状を辻編年に倣い、外反高杯、直口高杯、椀形高杯、大型高杯に分けて編年を提示した。近江古墳様式では、外反高杯がＡ４類、椀形高杯がＦ類、大型高杯がＡ２類に相当する。ただし、Ａ４類は、近江古墳様相において、椀形のものが混同されて提示されているため、Ａ４類の定義が曖昧なものとなっている。

上記の点に留意し、そのほかの湖北・湖東・湖南各地域も、今後検討していきたい。

５．おわりに

以上、湖西地域の一部の器種ではあるが、土師器の変遷について述べた。供膳器、煮炊き器の一部の変容を今回の検討で述べることができた。

近江古墳様式の課題として、４様式の細分や、高杯の形式分類など、再検討を必要とする点があることもわかった。

一方で検討をおこなえなかった器種があること、周辺地域との比較がおこなえなかったことが課題として残る。また、古墳時代後期の変遷も全て触れることができていない。これらの課題を踏まえ、今後、周辺地域との関係性を考えていきたい。

文献一覧

植田文雄（1994）「古墳時代土器論―近江の土師器、その変遷と画期―」『滋賀考古』第 12 号　滋賀考古学研究会

植田文雄（2007）『前方後方墳出現社会の研究』学生社

財団法人大阪府文化財センター（2006）『古式土師器の年代学』

笹栗拓（2017）「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年―古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質―」『大阪文化財研究』50 号公益財団法人大阪府文化財センター

田辺昭三（1981）『須恵器大成』角川書店
辻美紀（1999）「古墳時代中・後期の土師器における一考察」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室10周年記念論集―』大阪大学考古学研究室
辻美紀（2002）「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅸ』財団法人大阪市文化財協会
寺沢薫（1986）「古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
中久保辰夫（2017）『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会
中野咲（2011）「古墳時代中・後期における大和盆地の土師器編年とその特質」『考古学論攷―第33冊―』奈良県立橿原考古学研究所
中野咲（2023）「古墳時代中期における畿内と東海の境界の土器様相―伊賀地域における土師器高坏の系統の整理を中心として―」『Mie history』第30号 三重歴史文化研究会
米田敏幸「土師器の編年1 近畿」『古墳時代の研究』6 雄山閣

挿図典拠

安曇川町教育委員会（1979）『南市東遺跡発掘調査概報』
安曇川町教育委員会（1980）『南市東遺跡発掘調査概報』
滋賀県教育委員会･公益財団法人滋賀県文化財保護協会（1994）『針江川北（Ⅱ）遺跡・吉武城遺跡〔本文編〕』
滋賀県教育委員会･公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2004）『下五反田遺跡』
滋賀県教育委員会･公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2019）『上御殿遺跡』
高島市教育委員会（2019）『南畑古墳群･下平古墳群発掘調査報告書』

（かごお　ひろゆき：調査課　技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.38　2025.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

SINCE 1970

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages